

吉備国際大学
社会福祉学部研究紀要
第13号, 163 - 173, 2008

基本的欲求の充足と子どもの幸せ感についての研究

田中 禮子

Happy Feelings of a Child by Satisfying Basic Needs

Reiko TANAKA

Abstract

What needs do you think a child satisfies when he feels happy in daily life? The author conducted a survey of children in the upper grades in elementary school to study this issue. It was made clear that a child feels happy when he/she gratifies physiological needs and a need for belonging. Moreover, a child has a need for achievement and a need for being socially accepted. Few children have a need for love and a need for independence at this age. In consideration of this result, the author discusses how an adult can enable a child to satisfy basic needs.

Key words : happy feelings age of upper grades in elementary school human basic needs
drawing

キーワード : 幸せ感 小学校高学年 人間の基本的欲求 描画

はじめに

子どもの引き起こす問題、特に、小、中学生のいじめ、暴力行為、非行などの他害行動は子どもたちのどうにもならないいらだちの表出であり、現代社会が生み出したエーリッヒ・フロムのいう「悪性」の攻撃性である。臨床心理学者の小柳晴生は、このような行動の背景には「自分とつきあう時間」を削りながら速い変化や物と情報の増大への適応を迫られる不安が潜んでいる¹と述べており、また、教育学者の田中孝彦は、悲惨な生活環境の中で生活し暴力行動をとらざるをえない子どもに対して「暴力を

含んで教師への反発を繰り返している、憎々しいと思えた生徒を、その生活のなかでとらえたとき、痛ましいとさえ見えてくることがある²」と理解を表している。筆者もまた、先行研究³やこれまでの筆者の研究⁴から、このような子どもの行動の背景には、人間としての子どもを軽視した外部環境との相互作用の中で生じるストレスによる子どもの心身のバランスの崩れた状態があるととらえている。この状態を回復させるために、子どもは自分と向き合い、自己努力（第一段階の対処行動）を行うが、それでも尚、回復できない場合には、再度第二段階の対処

行動をとる。それが子どもの暴力行為等の行動である。したがって、自己努力（第一段階の対処行動）によって対処できれば問題行動には至らないが、対処できなければ、問題行動が生じると考えられる。そして、この対処過程に影響を及ぼしているのが、地域、性別、家族形態、朝食の有無、遊びの有無などのような客観的指標として取り上げられる生活環境ではなく、生活の中で醸成される「幸せ感」である⁵。そのため、子どもの感じる幸せを理解することが出来れば、子どもの問題行動を減少させることが出来るのではないかと考えている。幸せ感をどう定義付けるかについては、「自分の人生への認知的側面とその評価に基づく感情⁶」だと規定したり、あるいは「主観的・総合的に自分の生活の評価する⁷」ことだととらえたりしているが、筆者は、幸せ感をより具体的に、「日々の生活において、必要な基本的欲求が満たされていると感じる、子どもによってなされる主観的な評価」だと考えている。

そこで、本稿では、子どもは、日常の生活のどのような場面でどのような基本的欲求が充足されれば、自分は幸せだと感じるのか、そして、その欲求は日常的にどのように取り扱われているのかということについて調べることにする。

1 幸せ感の調査

1) 先行研究と調査の視点

「何を幸せだとし、何を幸せだと感じるのか」、これは主観的な個々人の評価であるため、当事者も明確に表現し難く、また他の者がそれを理解することは、さらに難しい。これまでは幸せ感を国民生活調査が実施しているような生活環境の客観的条件からとらえるのが一般的であったが、生活水準が全体的に高くなり、平均化した現在では、この方法で幸福感をとらえることは困難となった⁸。そこで、心理学の分野では、幸福感を計るための心理的尺度を開発し、尺度として取り上げられた側面から幸せ感

をとらえようとしたり^{9,10}、幸せ感を構成する心理的要素や構造から幸福感をとらえようとしたり^{11,12}そして、開発された尺度とさまざまな指標との関連性から幸せ感をとらえようとしたりしてきた¹³。また、最近では、あらかじめ設定された客観的指標から理念的に幸せ感を推測するのではなく、客観的指標に代わり、当事者の語りから幸せ感をとらえようとする方法も注目されている¹⁴。社会福祉の分野では、1980年代以降、主として老人福祉領域、障害者福祉領域で、高齢者、障害者の生活の質（QOL）との関連で主観的幸福感が注目され始め、客観的指標に基づく研究が多く行われてきた。しかしながら、児童福祉領域においては、子どもの幸せ（well-being）は目的概念として取り扱われてはきたものの¹⁵、子どもの実際の生活にかかわる幸せ感の実証的研究は少ない¹⁶。

本研究は、子どもの実際の生活にかかわる幸せ感に関する実証的研究の一つであり、また、子どもの記述や描画を用いて、子どもの基本的欲求の充足という視点から子どもの幸せ感を検討することは、福祉分野では目新しい。

2) 検討枠組み

岡村重夫は、人間の基本的欲求は、生理的欲求と人格的要求に分けるのが一般的であるとし、さらに人格的欲求を人間の対人的交渉においてみられる基本的欲求だと説明している。それは、愛情の欲求、所属の欲求、成就完成の欲求、独立の欲求、社会的承認の欲求である。そして、愛情の欲求、所属の欲求は、人の精神的安定をもたらすので、これらは一括して安定の欲求とし、成就完成の欲求、独立の欲求、社会的承認の欲求を自信または独立の欲求としている¹⁷。また、A.H. マスローは、人間のもつ多様な欲求を5つの水準に分け、階層構造で説明している¹⁸。第1の水準（生理的欲求）第2の水準（安全欲求）第3の水準（所属と愛情欲求）第

4 の水準（尊重の欲求）、第 5 の水準（自己実現の欲求）である。

筆者は、この岡村重夫の「人間の基本的欲求」を基にして、また、A.H. マスローの欲求を参考にしながら、以下のような検討枠組みを設定した。

- (1) 生理的欲求（食欲、睡眠、休息、排泄、性欲、身体的活動に対する欲求など、生存を維持しようとする欲求）
- (2) 愛情の欲求（家族、その他の人から愛されたいという欲求）
- (3) 所属の欲求（友人仲間、家族その他の団体の一員としてこれに所属したり、自分より有力な存在の一部でありたい、力強い庇護者の下で安全でありたいという欲求）
- (4) 成就完成の欲求（社会的に価値あることを成就、完成の欲求）
- (5) 独立の欲求（他人の干渉を受けずに自主的に行動し、物事を自発的に選択したいという欲求）
- (6) 社会的承認の欲求（自分の行動が他人から感謝されたり、ほめられたりして、自分の存在が他人から認められたいという欲求）

なお、これらの欲求に該当しないものは、その他の欲求として取り扱うことにした。

3) 調査票と描画による調査概要と結果

(1) 調査概要

K 県 K 町で実施されている夏期休暇期間中だけの一時保育事業に参加している 5・6 年生を対象に、調査を実施した。調査概要は以下のとおりである¹⁹。

調査目的：子どもはどのようなことを幸せだと感じているのかを調べる

調査日時：2007 年 8 月 27 日（月）

11:00～12:00

調査場所：K 県 K 町社会福祉協議会研修室

調査対象：10 人：5 年生 8 人、6 年生 2 人、（男 3 人、女 7 人）

調査方法：集団法による自記式調査と描画調査

集団面接による自由記述調査は、B 6 版の罫線紙を配布し、「ふだんの生活で幸せだと感じたことを、思いっただけ全部書いてください。」と教示した。

描画については、18 色クレパスと A 4 版の用紙を配布し、「これまでの生活で幸せだと感じた時の絵を書いてください。」と教示した。

(2) 自由記述調査結果の整理

小学校高学年の子どもの感じる幸せについての記述を、前述した分類枠組みにしたがって、以下のように整理した。なお、この整理は、K 県下の小学校に勤務する養護教諭とスクールカウンセラーの協力を得て筆者が行った。

生理的欲求（8 人）80.0%

「寝る時 2 人 運動がたくさん出来ること
長い休みのとき ゆっくり風呂にはいったとき(疲れがとれる) 2 人 ごはんを食べること

愛情の欲求（1 人）10.0%

「母親がいること」

所属の欲求(10 人: 家族 4 人、友だち 6 人) 100.0%

「家族が居ること 家族と話をすること
家があること 家族が長生きすること
友だちが出来ること 友だちと仲良くなったとき 友だちと話す 2 人 友だちと遊ぶ 仲間はずれがない

成就完成の欲求 (4人) 40.0%

〔バトミントンの試合で勝ったこと 新し
い作品が作れたこと ゴルフがうまく飛
んだとき でかいプールで思いっきり泳
ぐ〕

独立の欲求 (1人) 10.0%

〔一人でゲームをする〕

社会的承認の欲求 (1人) 10.0%

〔習い事でほめられたこと〕

その他の欲求 (4人) 40.0%

〔平和の欲求 (2人) 20.0%
怖い事件が起きないこと ケンカがな
い(家で)
所有の欲求 (2人) 20.0%
お金をもらったとき (2人)〕

この調査では、幸せだと感じることの記述のうち、一番多かったのは、所属の欲求の充足に分類される記述で、10人の内、10人全てが記述していた。所属の欲求の充足に分類される記述の内、家族に関するものは4人、友だちに関するものは6人だった。次いで多かったのは生理的欲求の充足に分類される記述で、10人の内、8人が記述していた。そして、その内容は寝たり、入浴したり、休んだり等、休息に関する内容であった。成就完成の欲求の充足に関する記述は、愛情の欲求に関する記述、独立の欲求の充足に関する記述、社会的承認の欲求の充足に分類される記述は少なかった(1人)。その他の欲求については、登下校時の子どもが被害者になる事件の多発等最近の社会情勢の影響が反映されているようで興味深かった。

以上のことから、調査対象の子どもたちは、友だちや家族のなかに自分の場所を得て所属の欲求が満たされたときに、また、ゆっくり休み、食べ、運動をし、眠ることによって生理的欲求が満たされたときに、幸せだと感じていると言

える。

(3) 描画調査結果の整理

小学校高学年の子どもが描いた、自分が幸せだと感じる生活場面の絵を、前述した分類枠組みによって整理した。なお、この整理、分類も、K県下の小学校に勤務する養護教諭、スクールカウンセラーの協力を得て筆者が行った。

10人の内、2人は絵が描けなかった。絵を描いた8人のうち、5人の絵が所属欲求の充足に関する分類に該当した。家族や友だちと共にいる絵である。そのうち、家族と共にいる絵が3枚、友だちと共にいる絵が2枚あった。(この絵は描画時の筆者の問いかけには、家族みんなで食事をしているところだとの説明があったが、子どものみが描かれている。また、には人の顔が描かれていない。これらについては稿を改めて言及したい。) 成就完成の欲求の充足に関わる分類には2枚の絵が該当した。

生理的欲求 -

愛情の欲求 -

所属の欲求 (5人:家族3人、友だち2人) 63.0%

〔食事をしている場面 家族で海水浴
をしている場面 子供会の友だちと遊
んでいる場面 友だちと遊んでいる場
面〕

成就・完成の欲求 (2人) 25.0%

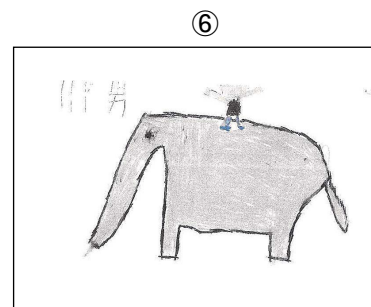
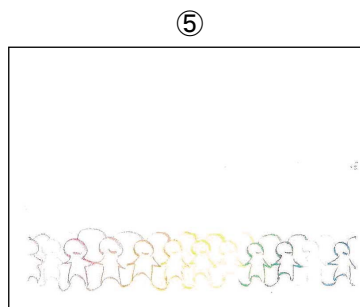
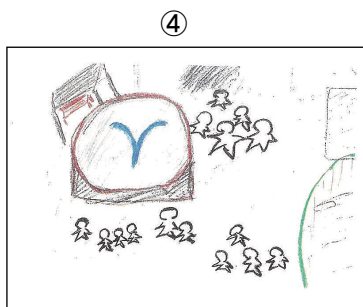
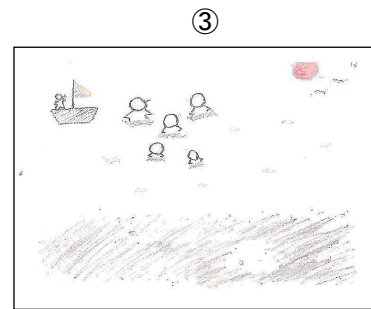
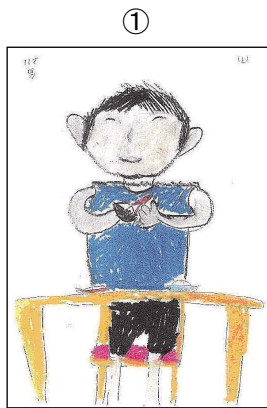
〔象にのって得意そうな場面 プール
に入って泳いでいる場面〕

独立の欲求 -

社会的承認の欲求 -

その他の欲求 (1人) 12.0%

〔所有の欲求 (1人) 12.0%
気に入っていた服を買ってもらえた場面〕



これらの絵から、6年の子どもたちは、家族で食事をしたり、友だちと遊ぶなど、家族や友だちのなかで所属欲求が満たされたときに、幸せだと感じていると言える。

(4) 調査のまとめ

一時保育事業に通う小学校高学年の子どもたちは、自由記述調査では、生理的欲求が満たされ、併せて所属欲求が満たされたときに、幸せだと感じているということが分かり、描画調査では、所属欲求が満たされた時に幸せだと感じているということが

分かった。

以上の二つの調査から、この時期の子どもの幸福感は、まず、所属欲求が満たされること、次いで、生理的欲求が満たされることに関連していると考えられる。

2 小学校高学年の子どものもつ基本的欲求の意味と理解

ところで、これらの欲求の充足を求める行動は、小学校高学年の子どもにとってどのような意味をもつのだろうか。

1) 発達理論から見る小学校高学年の子どもの状況

小学高学年生の時期は、エリクソンの発達理論では潜在期に該当している。エリクソンは、この時期を「自分が生まれた文化・社会のなかでの、いわば基本的文法原則と基本的技術を学ぶ」時期だと言っている。この年代の子どもは、非常に好奇心をもち、学びたい、知りたいという願望を持っており、そのため、「あらゆる文化においてこの年代の子どもに対しては訓練や教育が行われ」、子どもは『物を生産すること』によって認められることを学び、生産性を発展させる²⁰⁾、すなわち、生産的な状況を完成することが、子どもの目標になるという時期であるという。子どもは不断の注意と長続きする忍耐によって、『仕事を完成させる』喜びを通じて勤勉を身につけるが、この時期に生じ易い問題として、エリクソンは不安全感や劣等感の生起を挙げ、それらは「この段階に先行する段階での葛藤が充分解決されないために引き起こされる場合」「家庭生活（小さな家庭）が、学校生活のための準備をしていない場合」「すでにうまくやることを学んできたものを、教師が全然評価しないという場合」に生起すると述べている²¹⁾。また、津田真知子は、小学高学年生の時期は幼児期と思春期の狭間にあり、身体的発達と精神的発達のバランスの悪さにとまどいながら、子ども集団の中での多様な人間関係を経験し、喜びや苦悩、葛藤への対処を学ぶ時期でもあるが、先行する段階での課題である基本的信頼感の獲得が不十分である場合には、様々な形の問題行動が出現すると述べている²²⁾。

これらの知見からも知ることが出来るように、この時期は、社会的には最も決定的な意味を持つ時期であり、子どもを取り巻く家族、学校、友だちとの関係が非常に重要であるといえる。

2) K町の小学生の生活状況と基本的欲求

K町で筆者が実施した「子どもの生活に関する調査²³⁾」がある。調査結果から見る一般的な子どもの生活状況は、次のようである。

子どもは、6時30分から7時7時30分の間に起きる。朝食は、6時から7時30分の間に食べる。朝食はほとんどの子どもが食べているが食べていない子どもも約1割いる。食事をした後、集団登校をする。登校時間は7時から8時で、その時、ほとんどの家庭で家人がいる。平日は学校から3時30分から5時の間に帰宅する。帰宅したとき、8割の家庭に母、祖父母等の家人がいる。帰宅して夕食までの間、子どもは、家で自由にすごしたり、塾や習い事に行ったりする。夕食の時間は6時30分から7時30分である。夕食を家族全員でとる家庭が多いが、2割が母と子どもだけで、5分が子どもだけで夕食をとっている。

夕食から就寝までの間は、ほとんどの子どもは、母やきょうだいといっしょにおり、テレビを見る、父母と話しをする、家の中で遊ぶ、勉強をする、本やマンガを見る、手伝いをするなど自由に過ごし、少数の子どもが塾や習い事に行く。子どもが寝るとき、帰宅していない父は1割5分いたが、帰宅している父のほとんどがテレビを見ており、ほとんどの母は、片づけ、洗濯、など忙しく働き働いている。

家でよく話をするのは、母、きょうだいであり、父とはあまり話をしない子どもが多い。その内容は、学校であったこと、友だちのこと、遊びのこと、宿題や勉強のこと、テレビやゲームのこと、塾、習い事などである。

遊びは、2～3人の友だちと遊ぶことが6割と多く、自分の家や友だちの家でよく遊ぶ。遊びは、テレビゲーム、テレビを見る、本やマンガを読む、友だちと話をするなど静的なものが中心で、してみたい遊びはキャンプ、パソコン、スポーツ、探検など動的なものである。

手伝いを毎日している子どもは1割いたが、全くしない子どもも1割いる。

8割の子どもが塾や習い事に通っており、その内、5割の子どもが習字に、4割の子どもが学習塾に通っている。1週間に3～4日が一般的で、なかには数は少ないが7日通っている子どももいる。

家族は、核家族が5割、祖父母と同居は4割、単親家族が5分である。

父母の労働形態は、父母ともに勤め人が5割、自営が1割5分となっており母が無職は1割だった。

このような生活をしているなかで、子どもたちは家族や友だちとの所属欲求が満たされたときに幸せだを感じているのであるが、前述した先行研究からも分かるように、その要因をこのような外形的生活形態のなかに見いだすことは難しい。

3) マスローの発達理論からの所属の欲求理解

マスローは生理的欲求と安全の欲求が満たされると愛情や所属の欲求が出現すると述べている。社会の一員として認められたい、といった願望が日増しに強まり、支配的な欲求になる。それは、「人は、周囲の人びとと絶えずつながりを持つことにより、愛情、支持、好意、尊重、受容といった暖かい感情を受け入れ、これらを自らの精神的糧」とし、「また人は、周囲の人びととの競争や協力を通じて、互いに切磋琢磨し、ともに学び、向上を遂げることができる」からである。もしこれらの関係を持つことができなければ、「社会的諸要求が満たされないだけでなく刺激や交流を通じて作られる精神的機能の発達が阻害され、内面においても、十分なポテンシャルティを持続しえない結果に陥る」と、所属の欲求の重要性を述べている。そして、現代は、「人びとを結びつけている社会的絆が絶ち切れ、人びとは互いに孤独な群衆に陥っている。そこで人びと互いに深層において広汎な断絶がみられ、わずかに表面層においてのみ関係を結んでいるに過ぎない。

近代人は、一般に、所属や愛情の欲求を満足することが難しい」と言い、さらに、「近代社会が表向き個性の表現を自由に認めながらも、却って人びとの思想、信条、生活様式、流行現象などに個性が失われ画一化されるのはこのような人間関係の危機が感ぜられるからにほかならない」と言及している²⁴。

以上のマスローの説明から、強固な絆が深層にまで及ぶような人間関係を持つことが出来れば、所属の欲求を十分に満足することが出来るが、大人を取り巻く環境と同様に、子どもを取り巻く環境もまた、安定した人間関係をもつことが難しいと言う現状があり、この現状があるからこそ、所属の欲求が満たされたときに、子どもは幸せ感を抱くと考えられないこともない。逆説的に述べるならば、子どもは安定した深い絆を求め、それを確かめたいと願っているといえる。

3 子どものもつ基本的欲求の充足に対する社会的認識

子どもの欲求は、子どもを取り巻く環境との相互作用のなかで満たされる。ここでは、子どもの健全な育成環境に大きく影響を及ぼす報告書が示す、子どもの基本的欲求、特に所属の欲求への認識と取り扱い、実際に子どもの生活にかかわる家族の認識と取り扱いを検討する。

1) 青少年の育成に関する有識者懇談会報告書に見る子どもの基本的欲求への認識

平成16年3月に出された青少年の育成に関する有識者懇談会報告書²⁵では、学童期を「後の成長の基礎となる多様な知識経験を蓄積する時期」と見なししている。そして、この時期の課題として、「基本的生活習慣の形成」、「基礎的学力の修得」、「他者の認識と自己の形成」、「のびのびとした時間・空間の創出」を挙げている。子どもが幸せだと認識する所属の欲求、生理的欲求は、これらの課題の中で、どの

ように取り扱われているのだろうか。

「基本的生活習慣の形成」の課題では、睡眠、食事、排泄などは、健康の基礎であり、子どもの心身の成長にとって大きな影響をもつ。したがって、子どもが自ら一定のリズムで行えるように生活習慣を形成することが肝要だと考え、朝食や夕食を一人で食べるのではなく、家族や友達と食べるときが楽しいと感じている子どもが多いという実情を紹介し、この実情に対して、親に「方法は多様であっても親の責任として子がきちんと三食楽しくとれるよう配慮することが求められる。」とその責任を問い、子どもの生理的欲求の重要性を認め、それを満たすことを求めている。これは生理的欲求を充足するという視点からは肯定的に評価できることである。ただ、食事をするという行動に付随して、親子関係、家族関係の織りなす所属の欲求を充足するという点から見ると、「楽しく」というだけでは不十分であると考えられる。

「基礎的学力の修得」の課題では、平成12年に実施した学習到達度調査や国際数学・理科教育調査の結果、順位が低下傾向にあることへの懸念や、国際教育到達度評価学会の調査の結果、数学及び理科への学習意欲が低下していることの懸念が紹介されている。これは、学習領域だけに限定されてはいるが、成就完成の欲求に関連するものである。この現状に対して、報告書は具体的には、少人数学級化・教職員配置の一層の充実、教員が授業に集中できる支援体制の充実、授業内容の公開による教授能力の質的向上と指導法の改善を求めている。これは、子どもの基本的欲求やこの時期の子どもの達成課題を不適切に取り扱えば生起する問題、すなわち、エリクソンのいう不全感や劣等感の生起と達成課題の不適切な取り扱いを修正するための取り組みである。エリクソンは、前述したように三つの不適切な取り扱いを述べているが、この報告書ではその内の一つのみを取り上げ、終始しているようである。

「他者の認識と自己の形成」の課題では、意見発表には優れている子どもがいる一方で、仲間内で浮くことを恐れて自分の意見を言わない子どもも少なくない。自己中心的な態度や主張が問題視される一方で、いじめや逸脱行動への集団内での過剰な同調も指摘される現状を「自己意識が未発達」と説明し、この現状に対して、コミュニケーション能力を育成し、集団にかかわる経験をさせることによって対処しようとしている。具体的には、家庭や学校などの様々な生活場面において、日常的に、子どもが自分で考え、意見を表明し、併せて相手の意見を聞き、コミュニケーションする経験ができるように、また、家庭や学校、地域の青少年団体やボランティア団体など集団に積極的にかかわることによって期待されている役割を果たし、帰属する集団の成員相互の関心と愛着、信頼をはくくむことが出来る経験が出来るようにすると述べている。

この課題は所属の欲求に関係している。この時期の子どもは人とつながりをもつことによって、発達課題を達成しようとするのだが、マスローの述べるように、人と人を結びつける社会的絆が弱く不安定な状況があり、安定感を得るために表面的関係に終始してしまうという現実がある。実際には、所属の欲求を真に充足することが難しいということを認識しておく必要がある。

「のびのびとした時間・空間の創出」の課題では、少子化、消費社会化の進行で、子どもたちの生活は、決まった手続きで行動や意識が統制されるプログラム化されたものが多くなり、一方で、子どもの創造性や想像性、連帯感や規範意識の体験的な習得の場が少なくなっているという現状を紹介し、これに対して消費文化が進展した今日、子どもたちにのびのびとした時間を取り戻させることは難しい。けれども、消費社会の圧力・誘惑、犯罪や事故の危険から子どもを守り、のびのびとした時間が過ごせる積極的な場づくりが必要であると述べている。この課題は、

子どもの生理的欲求に関連するが、欲求への認識は低く、通り一遍の提言になっている。

以上、青少年の育成に関する有識者懇談会報告書の課題と小学校高学年の子どもが充たされると幸せだと感じる欲求を関連づけて検討した。

2) 子どもの生活と保護者の基本的欲求への対処

直接子どもにかかわっている家庭では、生活の中でどのようにこれらの基本的欲求を認識し、満たそうとしているのだろうか。前述したK町で実施した調査結果、すなわち、休みが長期にわたるときの子育ての工夫や、生じる問題についての記述をもとに、家庭での取り扱いを推測する。

子どもと共に遊んだり、旅行に行ったり、家業を手伝わせたり、夕食時やT.V.視聴時の会話を心がけている。(これは家族への所属の欲求の充足、遊びや手伝いを通じて達成する成就の欲求への配慮だと考えられる。)

家庭内で、子どものできる仕事を役割分担して手伝いをさせたり、宿題・学習時間、食事やT.V.の視聴時間を決めている。(これは、家族への所属の欲求、遊びや手伝い、学習を通じて達成する成就完成の欲求、そして、規則正しい生活を通じて充足させようとする生理的欲求への配慮だと考えられる。)

子どもの昼食；お弁当を作っておく、昼食の用意に一旦家に帰り、また仕事に行く、冷凍食品を用意しておく等の記述(食事をするという基本的な生理的欲求、気遣いを通じて家族の絆を表した所属の欲求への配慮である。)

子どもが自由に、安全に遊んだり、集まったり、宿題をできるような場所や公園、図書館、体育館の設置、子ども中心の行事の企画を考えて欲しいとの記述(いろいろな機能をもつ友達集団に所属して活動したいという所属の欲求、そしてそこでの活動を通じて充足出来る成就・完成の欲求や生理的欲求への

配慮である)

これらの記述から、保護者が、この時期の子どもに適した課題を取り上げ、適切な方法で日常的に、所属の欲求、成就・完成の欲求、生理的欲求、そして、社会的承認の欲求を満たそうと努力していることがうかがえる。

4 基本的な欲求の複合性

構造化されたマスローの基本的欲求やエリクソンの発達課題は固定な順序をもつものととらえられがちであるが、必ずしもそうではなく、保護者の家庭での配慮や次の事例などに見られるように複合し、統合されて存在するものである。長期的に見ると、これらの欲求は、基本的には階層性をもち、固定的な出現順序があり、これらの欲求の発現には長い時間の経過が必要だと考えられるが、短期的に見ると、必ずしもそうではなく、身近な生活場面で常に複合して生起しているようである。このことについて、マスローは、次のように表現している。「一つの欲求は次の欲求が現れる前に100%充たされなければならないかのような誤った印象を与えることになる恐れがあるが、実際的には、社会になかで大部分の人々は、すべての基本的な欲求にある程度満足し、ある程度充たされていない。例えば独断で数字を当てはめてみると、おそらく平均的な人では生理的欲求では85%、安全の欲求では70%、愛の欲求では50%、自尊心の欲求では40%、自己実現の欲求では10%が充足されているだろう。²⁶⁾

祖父の子育てに見る基本的な欲求のクロスオーバー

祖父の子育ての記録からの抜粋

Aは1歳半の幼児で、祖父は1週間に1日だけ孫を預かって子守をしている。

祖父：Aちゃん、かえるがいるよ。(子どもはじっと観察している)

かえるが祖父の手の上に飛びのると、祖父の片方の手を持ち、かえるを下ろすように指示する。初めてのかえるとの出会いで、不安と関心が交錯しているようである。)

祖父：もう下におるすの？(Aちゃんは満足そうな表情でうなずく)(自分を理解してもらえた、自分の意図どおりに物事が進んだという成就達成の欲求の充足ではないか)

(祖父が草を抜き、草を焼却場へもっていかうとすると、幼児は急いでその草を祖父の手から取り、焼却場へもっていき、得意満面で帰ってくる。(祖父と協働で草抜きの場に参加し、うまく草を運び終えたという所属欲求、成就達成の欲求の充足に関連している行為ではではないか。)

祖父：Aちゃん、ありがとう。(にこにこしながらうなずいている)(社会的認知の欲求の充足に関連しているのではないか)

(来客があると、座椅子をもってきて勤め、あいさつをする。自分も椅子に座り、お茶を満足そうに飲む)(自分もその場に参加し、メンバーの一員になっている。)

祖父：Aちゃん、何がほしい？(自分が欲しいものを指で示して、うれしそうな表情をする。)

祖父は急がず、ゆっくりと幼児に接している。幼児のペースで時間が流れ、幼児はまだ、言葉は話せないのだが、自分の意志が相手にはっきりと理解さ

れ、伝わっているということを体験している。幼児は家族の一員だという態度を示し、また、自分の出来る仕事を自ら手伝い、上機嫌である。

この事例は幼児の観察記録であるが、この事例から、子どもは常に基本的な欲求を持っていること、特定の発達段階に応じて特定の基本的欲求が突出するものの、他の欲求とのバランスをとりながら、発達に応じた方法で、自らのもつ生理的欲求、所属の欲求、成就・完成の欲求、独立の欲求、社会的承認の欲求を充たそうとしていること、周囲の者が複眼的視点からそれをいかに理解し、支援していくのか、その関係を通じて深い絆を結ぶことが出来るかどうか重要だと分かる。

5 今後の課題

本論では、小学校高学年生の幸せ感に関連していると考えられた、所属の欲求を中心とした子どもの基本的欲求についての認識と取り扱いを検討してきた。調査対象者数も少なく、予備調査段階での中間報告となっている。今後は、調査対象者を増やし、異なる社会環境にある子どもをも視野に入れて、幸せ感と基本的欲求の充足について、さらに調べていきたいと考えている。

注

- (1) 小柳晴生，大人がたちどまらなければ，日本放送出版協会，2005，1-8頁
- (2) 田中孝彦，今、子どもの心の声をきく，草土文化，1998，35頁
- (3) R.S. ラザルス他(本明寛他監訳)，ストレスの心理学，実務教育出版，2004，25-41頁
- (4) (5) 田中禮子，子どもが求める子育て支援 - 小学校高学年生の心身の安定と生活環境、対処過程に焦点をあてて - 吉備国際大学社会福祉学部紀要，11号，2006，37-48頁
- (6) 島井哲志・大竹恵子・宇都木成介・池見 陽，日本版主観的幸福感尺度の信頼性と妥当性の検討，日本公衛誌，51(10)，2004，845-852頁
- (7) 金恵京他，農村在宅高齢者におけるソーシャルサポートの授受と主観的幸福感，老年社会科学，22(3)2000，395-404頁
- (8) Campbell, Converse, Rodger, The Quality of American Life, 1976
- (9) Neugarten, Havinghurst, Tobin, Life Satisfaction Index 1961) Veenhoven R., Questions on happiness: classical topics,

- modern answers, blind spots. In E. Strack, M. Argyle, N. Schwartz (eds.) Subjective well-being. Oxford: Pergamon press, 1991, 7-26頁
- (10) 藤田利治他, 老人の主観的幸福感とその関連要因, 社会老年学, 29, 1989, 78-85頁
- (11) Andrew, F.M, Withey, S.B. Social Indicators of Well-Being: America's Perception of Life Quality. New York: Plenum Press, 1976
- (12) 前田大作他, 高齢者の主観的幸福感の構造と要因, 社会老年学, 30, 1989, 3-16頁
- (13) 金恵京他, 農村在宅高齢者におけるソーシャルサポートの授受と主観的幸福感, 老年社会科学, 22 (3) 2000, 395-404頁
- (14) 田中禮子・横山奈緒枝,
地域での生活サポートシステムの形成に向けて - 基盤調査 (1) -, 吉備国際大学社会福祉学部研究紀要 7 号, 179-190頁
- (15) 許斐有, 子どもの権利と児童福祉法, 信山社出版, 1996, 49頁
- (16) 福永信義他による、家庭、地域での人間関係とコミュニケーション量が幸福感と関連があるとの研究がある。
福永信義・柴原宣幸, 児童生徒の日常的幸福感と家庭・地域での人間関係, 敦賀論叢, 17, 2002, 35-49頁
- (17) 岡村重夫, 社会福祉原論, 全国社会福祉協議会, 2000, 72-73頁
- (18) 上田吉一, 人間の完成 - マスロ - 心理学研究 -, 誠信書房, 1999, 27-58頁
- (19) 香川県琴平町社会福祉協議会が夏季期間中に実施している学童保育に参加している 5・6 年生を対象として調査を実施した。
- (20) R.I. エヴァンス, 岡堂哲雄, 中園正身訳, エリクソンは語る, 新曜社, 31 - 33, 1981
- (21) E.H. エリクソン, 小此木啓吾他訳, 自我同一性, 誠信書房, 1988, 106-107頁
- (22) 津田真知子, 学童期の子どものウェルビーイング, 現代のエスプリ 453, 至文堂, 2005, 61-69頁
- (23) 田中禮子, 子どもの生活に関する調査, 実施期間平成 9 年 10 月 3 ~ 5 日 調査対象 K 町内の小学 2・5 年生, 平成 11 年 2 月 13 日 K 町社会福祉協議会大会にて口頭報告
- (24) 上田吉一, 人間の完成, 誠信書房, 1999, 42-44頁
- (25) 内閣府政策統括官, 青少年の育成を考える, ぎょうせい, 2004, 51-61頁
- (26) A.H. マスロー (小口忠彦訳), 人間の心理学, 産能大学出版部, 1987 80-90頁
- (27) 「祖父の子育て観察記録」K.T. 氏による観察記録である。現在, 継続執筆中である。